

あ　　る

O W L

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 31

国境が幾度も引き直された樺太。
先住者の樺太アイヌの人々は
領土を主張する二国に翻弄され、
悲劇的な運命を辿った。

樺太アイヌの北海道移住

明治八（一八七五）年五月、ロシアと国境を確定する樺太・千島交換条約が調印された。日本が千島列島の一八島をロシアから譲り受けるかわりに、樺太全島を放棄するという条約であり、樺太はロシア領になった。

その際、先住民族である樺太アイヌの人々は、どちらの国につくか自由裁量にまかされた。その結果、樺太南部にいたアイヌの人々の多くは日本国民になることを決め、樺太と気候・地形の似た宗谷地方に住まわせてほしいと希望した。

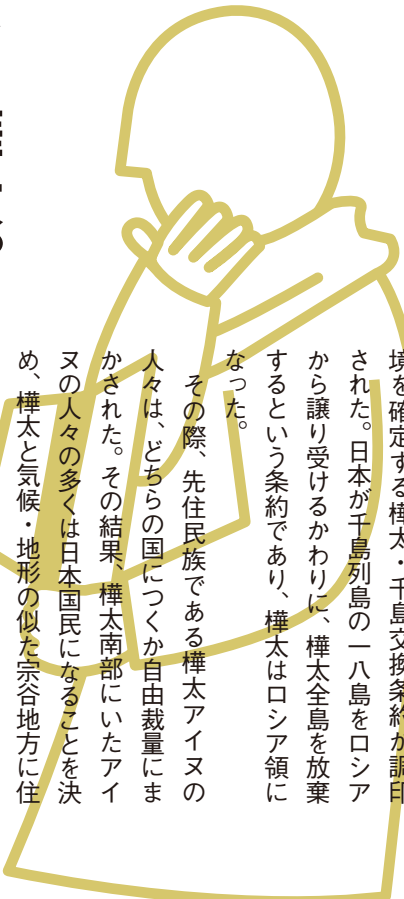
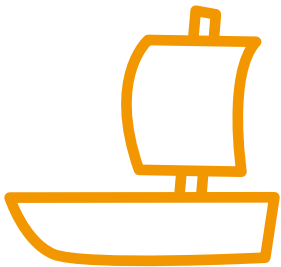
しかし、開拓使長官の黒田清隆は、宗谷を「ノー」とし、石狩地方の内陸への移住を提示したため、北海道移住を決めた樺太アイヌの人々は困惑してしまっ

黒田対アツシ判官松本十郎

これに同情したのが、開拓使大判官の松本十郎だった。彼はアイヌ民族を公平に扱い、アイヌ住民からもらったというアツシ「アットウシロオヒヨウ」などの内皮繊維で織られたアイヌ民族の伝統衣服を大切に身に着けていたため、アイヌの人々から「アツシ判官」と称され敬意を払われていた。

そんな松本である。彼は樺太アイヌの人々を住み慣れた地に近い所に移住させ、本来の生業である漁業に従事させることを主張していた。しかし、黒田はこれを却下。二人は対立した。

黒田には開拓使から距離が近く指導しやすい石狩で、北海道の産業振興のための労





開拓長官時代の黒田清隆
『明治大正期の北海道(写真編)』
より転載)

働力として利用しようという思惑があったのだ。

宗谷から対雁へ

樺太アイヌが故郷を離れなければならぬ期日が迫ってきた。ロシア人が彼らの家屋を焼き払って追い出しをはかったため、十月、やむなく一〇八戸八四一人が樺太に別れを告げ、メクマ(稚内市声問村)の浜に上陸した。

彼らは宗谷から遠く離れた石狩行きを強く拒んだ。開拓使は代表を呼んで予定地の対雁(江別市)を見せ、石狩川の好漁場を与える約束もした。だが、戻って来た代表

の報告を聞いても誰一人賛成しようとはしなかった。

「アツシ判官」松本十郎も懸命に中止を訴え、しばらくは宗谷にいてもらい、時機を見て石狩に移住させてはどうか、との折衷策を提案したが、結局、アイヌ移住者の意向や松本ら開拓使札幌本庁の反対を押し切り、黒田は明治九年六月、対雁への強制移住を断行した。松本が地方視察をしている間の措置であった。

松本十郎の辞職

強制移住の報を聞き、松本はすっかり落胆してしまい、辞表を提出。北海道を去ることになった。これを知った黒田は、北海道にあわてて駆け付け、松本を引き留めようとしたが、すれ違いに終わる。

松本は「閣下はアイヌを石炭鉱の役に従事させようとしている」といった内容の手紙を残していた。なぜそう思ったのか？

「アツシ判官」の願い空しく
強行された内陸への移住は、
海の民・樺太アイヌの人々に
多くの苦しみを生んだ。



石狩川宇シビシビウス(樺太アイヌの人々に割り当てられた鮭漁場の一つ)での鮭漁業
(北海道大学附属図書館所蔵)

その因は榎本武揚にある。

当時ロシア特命全権公使だった榎本が、黒田に手紙で「樺太島より移り来る蝦夷人を開坑の工夫に用ゆる為、幌内辺に住ませ候はば至極便利」と提案したので。黒田と榎本の関係は箱館戦争以来特別なものであったから、松本はてっきりこの榎本案が採用されるものと思いき、樺太アイヌの行く末を憂えたのだ。

榎本のこの余計とも言える提案が、松本を辞職に追い込んでしまった。その後、松本は故郷・鶴岡に帰り、一介の農民として生涯を送ることとなる。

アイヌ移民の悲劇

対雁に強制移住させられた樺太アイヌに対する開拓使の力の入れようには並々ならぬものがあった。膨大な国費を注ぎ、土地を提供し、農業試験場などを造って官営事業を手伝わせた。だが、樺太アイヌは海の

民。結局この計画はうまくはいかず、彼らはサケ漁やニシン漁に従事することになる。

しかし、悲劇が起こった。コレラや天然痘などの疫病の流行によって、三〇〇人以上が命を落としてしまったのだ。あとに残されたのは、樺太アイヌの恨みと国費の浪費だけであった。

強制移住から三十年後の明治三十八(一九〇五)年、日本が日露戦争に勝利し、樺太の南半分が日本領になると、三三六人が故郷・樺太に帰っていったという。

だが、さらに悲しい運命が彼らを襲う。昭和二十(一九四五)年、今度は太平洋戦争の敗戦により、樺太から再度北海道への移住を強いられ、稚内内の荒野で新たな村づくりをしなければならなかったのである。

日・口国境に生きる民族ゆえの悲劇であった。



開拓使によって札幌郡対雁村に強制移住させられた樺太アイヌの人々
(北海道大学附属図書館所蔵)

あつろの 杜 山本雅彦さん

フォトグラファー

Interview

「町の床屋さん」のような写真家でありたいという山本雅彦さん。長年続けた新芸能集団「乱拍子」が今年4月にチュニジアで行った公演を写真集にしました。

「町の床屋さん」感覚で撮る

私は小樽で生まれ育ちました。そのあと札幌です。若い時って自分が何をしたいかわかりませんので、大学を出てから五〜六年、自分探しの旅をしていました。

たまたま園芸の月刊誌を出している札幌の出版社が社員を募集していたので受けてみたら合格。しかし勤めて二年ほどで潰れてしまい、それで写真の仕事に。最初はスポーツカメラマンでした。そのうちにステージの写真も撮り始めた。同じ機材で撮れますし、近くで撮るというのもすごく魅力的だなと思っただけです。

フォトグラファーというと芸術的な写真を撮る人と思われがちですが、私は身近な存在を被写体にした写真を撮ろうと心がけています。親しみを込めて写真を見てもらえるような「町の床屋さん」のような存在でありたい。どこにでもある日常的なスナップ写真を撮っていければいいなあと。しかも相

手の気持ちをしつかりと汲んでいる写真ですね。その人の内面を引き出すことに魅力を感じながら写真を撮っていますから。そのせいかどうしても人物写真が多くなりますね。

「乱拍子」

「乱拍子」代表の村場辰彦さんは



「乱拍子」の内面を写し出す写真を求め…

山本雅彦
やまもとまさひこ

1955年小樽市生まれ。大学卒業後、旅を通して人のこたわりにふれる機会に出会う。
・釣り針を真っ直ぐに打ち直し魚がかからないのに釣り糸をたれる釣り人
・モヤシのヘタを一本一本丹念に取りお客に出しているラーメン屋店主、など
人が何かにこだわる表情、視線、心の在り方に人生の妙を感じている。現在は札幌市内の保育園・幼稚園の行事撮影をするかわら「乱拍子」を始めとするライブステージ等の撮影を手がける。「乱拍子」写真集の刊行も予定している。

新芸能集団「乱拍子」

村場辰彦・容子夫妻で始めた村場流八丈太鼓に息子たちや義理の弟が加わり、1999年に立ち上げる。和太鼓を柱とした伝統芸能の流れを汲みながら、新しい太鼓の響きを北海道に生み出そうと、オリジナルの創作活動に挑戦している。2011年アメリカ、2013年インド、2017年チュニジアなど、海外でも公演を行っている。



鹿兒島県出身ですが、東京の国立音楽大学に入学し、そこで八丈太鼓に出会います。その八丈太鼓の稽古に何年も通い詰めて、今まで外部の人が賞を取ったことのない、おらが町の八丈太鼓の大会で準優勝をした。それは単なる準優勝ではなくて八丈太鼓の人たちが村場さんを認めたという証だったんでしょうね。

その村場さんが同じ国立音大の女性と結婚し、東京で太鼓をやっていたが、音がうるさくて練習も仕事もできなかった。それで北海道に練習場を求めてやって来た。広い北海道は彼らの志に合った場

所だったんですね。

現在の「乱拍子」の編成は、村場夫妻と子どもたち、それに奥さんの弟という村場ファミリーと劇団員一七〜一八人、あとスタッフが一〇人ぐらいです。なかなか大変なことが多いのですが、一つひとつ精魂込めて物事に当たる村場さんを見ていると、人間の力というものを感じます。

「乱拍子」との出会い

私は撮影をしていく中で「乱拍子」と出会ったのですが、最初に会ったとき、劇団内で「やめた」「やったられないよ」という大喧嘩をしていたんです。芸のことが喧嘩の原因でした。「すごい。人前でこんなことを平気でやるんだ」と思いました。

「乱拍子」の生活のすべてが太鼓や里神楽などの芸中心です。防音装置が付いている学校や芸術の森などで毎日練習をしています。ちよつとしたことでもみんな話し合います。とても深く話し合います。まさに家族の繋がりでですね。昭和の初期とか大正時代の生活をいまだにしているような感じですね。

彼らに「出会えてよかったなあ」と思います。一人ひとりそれぞれに魅力がありますし、個性的だし、

人間性豊かな人たちですから。

被写体

「乱拍子」の人たちを撮ってみると、その表情がなかなかいいんですよ。それで、彼らの日常を覗いてみたいと思い、撮影するようになりまして。今では年中ほとんど関わっており、時間がある時は必ず家に行ったりしています。

彼らが意図するパフォーマンスがちゃんとできているか。そこにシャッターチャンスを探っています。

何気ない彼らの笑顔の裏には、本当はちよつとした心配事を抱えたりしている。車が壊れてどうにかしなければいけないとか、公演に使う太鼓が破れる寸前で、そのお金をどう工面するかとか、そんないろんな難しいことを潜り抜けて本番の舞台上に立つわけです。そのとき彼らがどういった表情をするのか、つぶさに見たいと思っっています。彼らの苦悩を写し出せれば最高ですね。

みなさんにも、ぜひ「乱拍子」のパフォーマンスを見ていただきたいですね。舞台上で彼らの才能がほとばしっていますから。自分たちが志した芸にしっかりと評価をしてもらえることが、彼らの生きがいだと思います。

「神対応」

我々は死ねば仏になります。神になるのはほとんど不可能です。しかし最近では、「神対応」という言葉をよく耳にします。

これって、もともとは企業のクレーム対応や顧客対応などが、びっくりするほど行き届いているときに用いられる表現だったとか。ならば「仏対応」という表現もあつてよさそうなのですが、あまり聞いたことがないですね。慈悲深さ、人の好きでは「仏」が上のようないです。神がかつていてすげえということ、「神対応」なんてしよつね。

そんな「神」に関する諺にはどういふものがあるのでしょうか。

まずは、「捨てる神あれば拾う神あり」。日本には八百万の神がいるのだから、困ったことがあつてもがっかりすることはないよという、悩んでいる人を励ます諺ですが、残念ながら必ず神が拾ってくれるという保証はどこにもありません。我々も身勝手なもので「困った時の神頼み」「苦しい時の神頼み」と、そんな時だけ調子よく神様にお願いをしがちですね。ところで神様ってどこにいらっしゃるのでしょうか？

「神は正直の頭に宿る」。どうやら正直な人の所にいて、そんな正直者を守ってくれるようです。

では神様とはどう付き合えばいいのでしょうか？

「触らぬ神に祟りなし」だそう。完全に逃げの姿勢ですね。同じような意味で「仏ほつとけ神構うな」という言葉もあります。深入りはダメ、ほどほどにしようということなのでしょう。

どうやら神には安易に近づかないほうがいいようです。「神のイタズラ」や「神様の罰が当たる」こともありますからね。

O W L I N F O R M A T I O N

地球の見方が変わる。時空間を体感する新展示室

常設展示室新設 特別企画
惑星地球の時空間

8月4日(金)～10月1日(日) 10:00～17:00(金曜日は21:00まで)
北海道大学総合博物館 3階S301(札幌市北区北10条西8丁目 TEL011-706-2658)
休館日/月曜日(祝日の場合は翌日休館)・9月3日(日)
入場無料

北海道大学総合博物館に収蔵された約40万点もの鉱物や岩石、鉱石標本の一部を公開する「鉱物・岩石標本の世界」展示室が8月4日にオープンします。博物館の耐震改修工事のために解体された旧展示室に替わる展示では、「地球を感じる展示」として「6.4m(100万分の1スケール)の地球断面図」と「4.6mの地球史カレンダー」を設置。クラウドファンディングの支援で制作された迫力あるパネルと、地球環境を反映した鉱物・岩石から、日常スケールでは想像しにくい地球の悠遠な時空間を体感できます。



展示室のイメージ

また、8月6日からは同博物館1階企画展示室で札幌国際芸術祭のプロジェクト「吉増剛造「火ノ刺繍-石狩シーツ」の先へ」を同時開催。「石狩シーツ」のビジョンを振り返るとともに、その先に待つものへと分け入る新作を発表します。

北海道美術を概観する名品50点

開館40周年記念 近美コレクション第11期名品選
北海道美術50 名作の秘密を探る

8月26日(土)～11月7日(火)
9:30～17:00(10月13日までの金曜日は19:30閉館。入場は閉館30分前まで)
北海道立近代美術館(札幌市中央区北1条西17丁目 TEL011-644-6882)
休館日/月曜日(祝日の場合は直後の平日、11月6日は開館)
観覧料/一般510(420)円、高大生250(170)円、65歳以上・中学生以下無料
※()内は10名以上の団体料金。ほか各種割引制度あり

開館40年を迎えた北海道立近代美術館が、同館と三岸好太郎美術館のコレクションから厳選した、北海道ゆかりの作品50点を紹介する書籍を8月下旬に出版します。各学芸員が「楽しんでほしい!」と選んだ鑑賞ポイントや作品の背景を解説した、美術の楽しみ方が広がる内容となる予定です。

書籍の出版に合わせ、同館では誌上で取り上げた江戸後期から現代までの日本画、油彩画、版画、彫刻などを集めた展覧会を開催。「名作の秘密」に触れながら、北海道の近現代美術の魅力を再発見することができます。また、展示室2階では「北海道の陶芸」「ふれるかたち」「この1点を見てほしい。」を同時開催。北海道の美術を様々な視点から楽しむ仕掛けが用意されています。



酒場の匂いがする、戯れ言と云々。

サカバナ

シーズ編集部・編
定価:本体633円+税(電子書籍版も同価格)

酒にまつわるエッセイや小説、呑兵衛の言い訳、何の役にも立たない泥酔記録などを拾い集めた「酔い本」です。

札幌を主戦場とし、日々酒場に集う総勢二十数名の北の飲兵衛たちが、飲酒について、酒場について、あるいは失われた記憶についての思いを各々自由な形式で寄稿。深夜の酒場で相席客の一人語りを聞いているような、不思議な臨場感が漂う脱力作。遊び心満載の使用済み(風)コースターが付いています。



シーズ(発売元:中西出版)
四六判、192頁
2017年6月刊行
※電子書籍の価格は希望小売価格

心で感じる35の人生訓

縁を紡ぎ、人を育む

生き方・仕事ぶりを高める人生35訓
石田邦雄・著
定価:本体1,600円+税(電子書籍版は1,500円+税)

研修講師やキャリアコンサルタントとして人材育成や組織改革に長年携わってきた著者が、講義で伝えてきた言葉や話題にのぼるフレーズを「生き方」「仕事ぶり」など5章35訓にまとめ上げました。

事例や体験談を交えたエッセイのように読みやすい語り口からは、「教える」ではなく「考える」、「学ぶ」ではなく「気づく」を重視する著者ならではの心配りが感じられます。朝礼や企業内研修のサブテキストにも適した一冊。



中西出版
四六判、298頁
2017年6月刊行
※電子書籍の価格は希望小売価格

懐かしさを誘う水彩画集

Sueko Yoshizumi Collection

吉積すえ子・著
定価:2,000円(税込)

札幌で水彩画を描く吉積すえ子さんが、これまでの作品を画集にまとめました。

画集には風景や静物画のほか、子どもの生き生きとした表情をとらえた童画や、吉積さんが大家族と過ごした幼い日の暮らしの思い出を描いた連作「北13条物語」などを収録。水彩絵の具の特徴を生かした明るく澄んだ色彩は、吉積さんがさやかな幸せへと向ける温かな思いを感じさせ、どこか郷愁を誘う作品集となっています。



吉積すえ子(自費出版)
B5変形判、95頁 2017年7月刊行
(お問い合わせは中西出版まで)



前号発行以後、出版記念イベントが続いた。4月に『新版 武四郎碑に刻まれたアイヌ民族』出版記念講演会、7月に「劇団「河」展・札幌展」と「吉積すえ子絵画展」を実施した。「武四郎碑」講演会は、来年が松浦武四郎による北海道命名150周年に当たるということもあり、立ち見が出る程の盛況であった。「河」展初日の「あの日たち、へ」出版記念トークイベントでは、当時活躍した劇団の俳優たちの熱い語り合いを聴かせていただき、「吉積すえ子絵画展」では、優しさや懐かしさを感じさせる作品の展示で共に好評だった。互いに苦戦を強いられているが、書店の協力も得つつ、新しい作品や作家を紹介する機会として、今後も企画を考えていきたい。(Y)

■発行・編集/中西出版(株)
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
電話011-785-0737 FAX011-781-7516
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
■発行責任者/林下英二
■発行日/2017年7月31日



http://nakanishi-shuppan.co.jp